

週刊メッセージ “ユナタン” 9

小学生になって、歌声が情感豊かになった“不思議”をたずねて

平成 27 年 11 月 25 日 片山喜章

11月10日、A園の卒園児の大半が通うA小学校を押しかけ訪問。音楽専科の先生からお話を伺うためでした。NHK全国学校合唱コンクールで好成績を収めたA小学校の「歌の指導法」に“あいづち”のリズムを刻みながら、その時、共鳴した学びの上にはフォルテシモ♪

『合唱コンクールといえば、とにかく子どもたちの表情がスゴイ。鋭い眼光で隆々と歌いあげる姿はなんだか滑稽だな』かつて、そんなふうに茶化していました。今現在、“精神が高みに登りつめた姿”と感じられます。それはたぶん、その後の仕事のなかで、人間・表現、精神・鍛練、保育・教育、指導性について、思案し探究し続けたために体得できたからでしょう。けれども、今もなお、幼少児が合唱する際の「歌唱指導」について、考えが定まらない部分があります。

「表現」とは何でしょう？ 子どもが豊かに歌うための指導のコツは？ 好きなように歌ってはダメなの？ 様々な疑問が高く低く、長く短く、順々に飛んできて、ハテナマークがメロディーを奏でます。しかし、懇談後、いくつもの「？」が「！」に転調した、そんな日になりました。

30年くらい前、私が連続4年間、3歳児（人数は24～28人）を複数担任していた時の事です。毎年、相方が変わる中、声楽を学んで透明感のある歌声を披露する先生と組んだ時の子どもたちの“歌いっぷり”は破格でした。「担任が歌好きで、とっても上手だから当然」とさらっと受けとめていましたが、実は、そこに“核心”が潜んでいたのです。もっと深く探究すべきでした。その子たちは、4歳、5歳と成長するほど、歌声は、荒くなるように感じられました。

音楽専科の先生といっても、他分野の先生たちがそうであるように、それぞれお持ちの哲学が異なります。10年くらい前、B園に音楽の先生が「レッスン」に来られた時、大きくガナって歌うこともグッドでした。子どもたちは“元気いっぱい”歌って“楽しい”時間を過ごしました。「声を張り上げるのも、自己表現！」であるとの解釈。ん…？ 疑問が浮き沈みします。

一方で、30年来のお付き合いのあるキリスト教保育を営むC園は、毎日、きちんと礼拝し、子どもたちは聖句とともに、こども讃美歌を斉唱します。その歌声は、透き通って、時々、裏声が光ります。毎朝毎朝、数分間、全体でリズム打ちをし、先生たちは、毎月毎月、園内でピアノのシケンを受ける。音楽に対して揺るがない哲学を持ち、ルーティンが確立している園です。その結果、気負いも力みもなく、伝統的に子どもたちの歌声は、美しい状態を保っています。

A小学校は、合唱コンクールの兵庫県大会で金賞、近畿ブロックで銀賞。保育園時代、ガナって歌っていた子どもが、なぜ、変身できたのか。その“秘密”を探り出すための訪問でした。

A 小学校の音楽専科の A 先生は、物静かで寡黙な方でした。「指導のコツ」や「授業のすすめ方」を軸に質問していきました。A 先生、曰く、「先生（集団）がその楽曲を十分に研究して、その曲の“こころ”を自身の中に深く取り込み、ひとりひとりを基本に伝える」つまり斉唱ありきではない、個別指導が基本になる。多くの園では、先生は譜面を見て、ピアノを弾きながら小分けに歌詞を伝えて、つないで歌って、くり返して、仕上げます。スタートからして、違う！

楽曲に対して、「先生自身が、表現者であるための“教材研究”が大事である」ことを強調されていました。私個人は昔から「教材研究」、つまり、適切な方法の問題（運動会の練習法等）が大事だと叫び、訴え、そして無視されてきました。昨今、保育界でもようやく「教材研究」の声を耳にしはじめたところです。保育者は、専科の指導者でもあるという認識を、臆せずに自覚することから、質の高い保育が展開されるという考え方が重要です。※ この論調に対して豊かな保育実践をしている園から批判を受けるのはわかっています。しかし子どもが豊かに育つための保育者の多彩な役割の1つであると重層的、構造的な観点で保育評価をしていただきたいです。

A 先生は、1つの楽曲を例に、両手をクラゲのように動かしながら「ここはこんな感じでしょ」「ここからこんな風にかわるでしょ」と美声をまじえながら私に説明され、ついつい私も隆々と歌いだしてしまいました。「授業中、斉唱する際、1人で歌う、2～3人で歌う、そこも大きなポイント」です。大声で斉唱すると自分の声も仲間の声も聞こえない、のです。「**ユナタン** 5の「自分の奏でた音を聴く大切さ」「小集団演奏」等を記した“ピアノカの話”に通じます。

17日、種の会が運営する児童館の学童保育の観察に出向いた際、A園時代、天井が突きぬけるくらいの歌声だったAさんに「1年生になって音楽会の歌声、変わったね」と私が声掛けすると「音楽の先生、めっちゃ、歌、うまいで～、♪ハ～アアア～」と返してくれました。A園時代、「個性的な歌声？」だったAさん、学校では、先生と歌を通して対話をします。先生は、その前に楽曲と対話し、歌の心を知る。まさに教育の原点です。「対話」の大事さは「**ユナタン** 7で「造形における素材との対話や保育者の促し」と関連しているだけに興味深かったです。

14日、D大学で終日講義をした際、お昼休み、控室で音楽の先生と談話しました。その先生はピアニストでありながら、保育園時代はピアノ伴奏なしで、伝統的なわらべ歌や遊び歌を日々の生活の中で根付かせるべしと訴えられました。確かにピアノ伴奏は、歌う意欲を高める反面、「素材としての個々の子の歌声」を掻き消してしまいます。基調は同じ。考える程に奥深い。

今後、各園、保育者集団で1つの楽曲を“ああだ”“こうだ”と、実際に自分たちで歌いこんで教材研究します。そこで体得した成果は…、子どもたちが歌声で表現してくれることでしょう。